# 顔色

かわいいなと思って誘ってはみたものの、いざよく話してみると何とも退屈な女の子だった。深夜の静かなカフェ。終電まであと少し、この子は帰ると言い出すだろうか。

「たぶんー、今日の映画って、おもしろいんだと思うのぉ。きっと、きっとねーでもねーあたし、だめなんだぁ」

「は？　何が？」

彼女は昼間一緒に見た映画の感想をまだしゃべっている。おれはもうそろそろ話を合わせるのにも疲れ始めていた。だんだん返事がそっけなくもなってくる。それも仕方がない。この子の話はほとんどがどうでもいい話ばかりなのだ。

「だめなの。あたしぃー、字幕読むのがすんごい遅くってぇ、どんどんおいてかれちゃうのー。へへっ」

「ああそう。ふぅん」

馬鹿なのだ。この子は。可哀相な子なのだ。まあ、男には女が馬鹿なほうが都合のい

いときもあるのだが。
「でもね、あたし、顔色は読めるのねー」
「顔色？」
空気は読めないくせに、この子ときたら。本当に面倒くさいことばかり言う。なんだ、顔色がどうした。ハリウッドのゴシップを顔色から読み解いたりしてるのか。デーブ・スペクターにでもまかせときゃいいじゃないか、その辺はもう。ああ面倒くさい。
――そんなことより。
そろそろ電車のなくなる時間なんだ。なあ、どうする？　その辺のことを切り出したいがなかなか会話は途切れてくれない。女の子はひとりで盛り上がったまま、話を続けている。
「映画をね、見ててもねー、字幕じゃなくてぇ、あたし、俳優の顔をじぃっと見てんのー。そうしたら、ストーリーがぁ、ちゃんとわかるのね、あたし。英語も全然わかんないんだけどー。すごくない？　ね、すごくない？」
「あぁ、そう。すごいね」
「目は口ほどにぃモノをゆー、的な？　顔がモノを言う、みたいな？　ふふっ。だから、逆にぃー。俳優が演技下手だとぉー、ストーリーがぜんっぜんわからないのっ。今日のは、まーまー、って感じ。ニコラスさん？　ケイジさん？　彼はよかったんだけど。相

手役の女優の人がねぇー。ニコラス・ケイジが刑事役やったらケイジ刑事だねーっ。可笑しいねーっ」

可笑しくない。どうすんだ、この感じ。笑うか、とりあえず。あははは……。

女の子が腕時計を見て、ストローで氷をもてあそびながら限界まで薄まったアイスティーをすすった。ずずるっと鳴る。悲しい響きだ。

「もう一杯頼む？　っていうか、家どこなの？」

話が止んだところで、本題を切り出した。

「横浜」

店の時計を見やると針は午前一時を指そうとしていた。横浜か。でも、まあ都内であろうと、もう電車はない時間か。

「あ、そうなんだ。もう電車ないね。どうする？　うち来る？」

女の子がにこっと微笑んだ。いちばんかわいい顔をした。

「でも、どうしようっかなぁ……」

なかなかそのあとに言葉が続かない。時間が止まった。あ、何か変なタイミングで言ってしまったのか？　おれは。ああ……、もう。この子といると調子が狂う。彼女のペースに振り回されるうちにこちらまで空気を読めない人間になってしまったのかもしれない。いらいらする。

長い空白があって彼女はまっすぐこちらを見つめた。
「あたし……友達がこの近くに住んでるから、そこ行こっかなぁ」
「えっ？　あ、そう……？」
へぇ。そう来た？　あ、そう。そうなの。
「……あ、あーっ。もしかして、いま、おれの顔色見たんだろう？」
できるだけ自然な笑顔でそれとなく茶化す。こうやってジョークにでもしないと何だかバツが悪いじゃないか。
「えーっ、顔色ぉ？　んふふふ。見たよぉー。あー、怖い、怖い。どうも、ごちそうさま」
女の子はそう言うと一方的に席を立ち、店を出て行った。
食い逃げするわけにもいかず、おれは急いで会計を済ませてからあとを追ったが、通りにはもう彼女の姿は見えなかった。携帯に電話をしてみるがつながらない。なんだよ、まったく。でもまあ、いいさ。こんな日もある。
おれはタクシーをつかまえて乗り込んだ。やけに面倒くさそうに行き先を訊ねる運転手に、おれも面倒くさそうに答えると、返事もなしにタクシーは走り出した。おかしい。スピードが出すぎている。数秒後、タクシーが勢いよく駆け抜けようとした黄色信号の交差点に、横からトラックが突っ込んできた。ガシャーン――。

「ねえ。どうだったの？　今日の男は」
「顔と体はいいんだけどねぇ。中身が馬鹿でさー。ずっとあたしを見下しっぱなしでぇー」
「うわー。ははは。最悪ぅー」
「でもまあ、女には男が馬鹿なほうが都合のいいときもあるんだけどねぇー」
「はぁ？　あんた、その〝都合のいいとき〟ってのが、今日だったんでしょ？　なら、なんであたしの家なんかに来てんのよ？　そいつの家に泊まってくりゃよかったじゃん」
「そうなのー。でもさぁー、あたしって顔色読めるじゃん？」
「だから何？　いまさら、下心が見え見えでー、とか言うわけ？」
「違うの。そいつさぁ、会ったときからずっと、顔に死相が出てたの」